

今回は済南市(ジーンンと読む)である。山東省の省都であるが、日本人には余りなじみが無い都市かも知れない。人口は大連市と同じくらいの600万人。しかし面積は、大連市の60%程度である。済南市は黄河(昔は済水と言った)の南にあることから済南と言う名前がついた。ちなみに遼寧省の省都の瀋陽市は渾河という大河の北に位置する。渾河は昔は瀋水と呼ばれ、水の北側は「陽」南側は「陰」とする風水の考えを取り入れ、瀋陽という名前となった。済南も済陰でもよさそうだが済南となった。

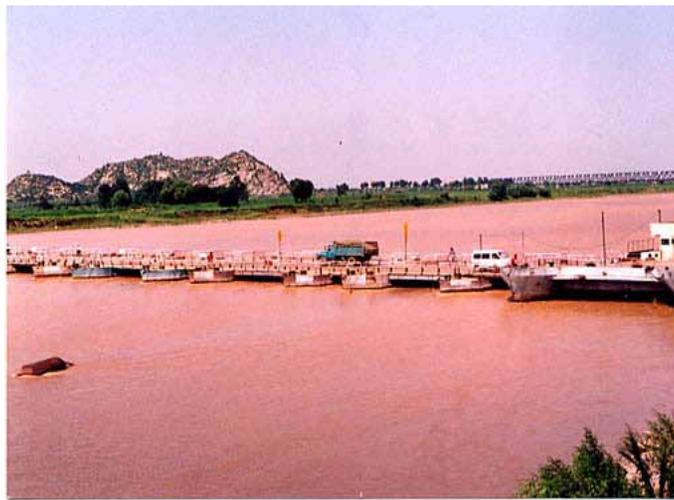
さて済南は、北に黄河、南に泰山というところに位置する古都であり水の都でもある。これについてはのちほどふれる。泰山の南には曲阜という街があるが、ここが孔子の生まれ故郷である。前回の「大連市」のところで書いた「一山一川一聖人」である。

まず黄河についてふれてみよう。黄河は長江とともに世界的な大河であることはご承知の通りである。長さは5464kmであり中国では長江について長い。日本の最長の河川である信濃川でも367kmしかない。いかに長いかということである。その源は遠く青海省に発する。今年4月14日に発生し、約3千人もの死者・行方不明者を出した青海大地震の震源に近いところである。黄河の水は黄土高原を經由していくため黄色であることはテレビなどで見てはいたが、実際この目で見てみたいと思いたくシーに乗って見に行った。市の中心部から20分くらい乗ると、有名な浮橋についた。これは字の如く橋ゲタのある通常の橋とちがい、タンクのようなものをつなげて渡れるようにしてあるのだ。そこには滔滔と流れる黄色い濁流があった。かなりの迫力であり「これが黄河か」と納得した。見ていると土地の人と思われる人が来て「絵ハガキを買わないか」と言うので三・四枚買った。夕陽に映える黄河の絵葉書はとても美しく、この河はいろいろな顔を見せるのだと思った。

次は泰山である。私は以前からこの山が特に好きで、一度登ってみたいと思っていた。私のメールアドレスを「t_taizan…」としたのもこの山が好きだからである。今は解散したが、漢詩の会に所属していた時、先生からつけてもらった名前は「泰堂」でこの名前も気に入っている。なにしろ泰山の泰の字が入っているからだ。この山はふもとから頂上まで何千段という石段が続いているが、

登ってはみたいが体力に自信がないのとちょっとした旅行で来ているのでゆっくり登る時間もなかったのでロープウェイを利用した。この山の高さは1545mで山東省では最高峰であるが、チョモランマ(=エベレスト山)をもつ中国ではたいした高さではない。しかしこの山は昔の皇帝が皇帝の正当性を示すための「封禪の儀式」を行った名山中の名山である。中国史上72人の皇帝がこの儀式を行っているのである。また孔子や杜甫など多くの名だたる人が登っているいろいろな言葉を残している。孔子は

「登泰山而小天下」(泰山に登ると天下と言うものは何と小さいことよ)という言葉を残している。山頂付近は大小の寺院が軒をつらねるように立っており、よくこんな頂上につくったものだと感心する。今ならヘリコプターで資材をあげてつくと簡単かもしれないが、文明の利器が何もない時代である。中国人の底知れぬ力を充分感じさせるものである。この



済南市・黄河「浮橋」

山の入り口には「第一山」の大きな石碑が立っていた。

最後は孔子について話してみたい。前述したように泰山の南に曲阜がある。曲阜とは「曲がっている豊かな丘」という意味と、ガイドブックにある。曲阜は、孔子に関する史跡のおかげで生活していると言っても過言ではない。ともかく町の人口の5分の1が「孔」という姓らしい。見どころは、孔廟と孔府と孔林である。孔廟は孔子を祀るために建てられた建築群であるがその中心をなすのは大成殿であり、中国の三大宮殿建築の1つである。孔廟について1つだけ付言すると、東京のお茶の水駅のすぐそばに湯島聖堂がある。孔子を祀ってあるのだが中に入るとうっそうとした木々の中に大きな孔子の石像がある。さらに進んでいくと目の前に大きな大成殿がここにもある。興味のある方は是非一度訪ねられたらと思う。孔府は孔子の嫡出子が代々暮らしてきた邸宅で、ここも何十という建物、何百という部屋がありこれを見るだけでも1日はかかると思われる。孔林は孔家歴代の墓所である。広大な森の中にいくすじかの道があり、すこし歩いて行くと孔子の墓の前に出た。よく見ると幅5cmくらいの鉄のベルトで割れた墓碑をくるようにしてある。聞くと文化大革命の時、紅衛兵がたおしてこわしたという。自分の権力維持のため物事の判断がよくできない紅衛兵を動かして、破壊させた毛沢東を私は全く評価しない。



済南市・趵突泉(しゃくとつせん)
池の中央の白い部分に水が湧き出ている

中国を旅行すると世界遺産の遺跡がなくなっていたり、こわれたり、よごされたりしている場所によくぶつかる。1つは紅衛兵によるものであり、もう1つは欧米諸国特に英・仏両国による破壊と泥棒である。この前もヨーロッパのオークションで北京の円明園にあった動物の銅像が出され、中国が返還するよう抗議したとの記事を見た。清の西太后の別荘ともいう立派だった庭園を尽く破壊し、そこにある文化財などを盗んで持ちかえたのは主にイギリスとフランスである。紳士の国とよく言われるが、私に言わせれば盗っ人の国である。以前イギリスに行ったとき大英博物館も見したが、世界中から盗んできたものを展示して平気な神経はいったいどういうことか！

いずれにしても孔子は紅衛兵に壊された自分の墓を天国から見て悲しんだに違いない。

「一山一川一聖人」について書けばキリがないのでこのあたりで筆をとめ、水の都である済南について紹介したい。

済南には、「済南72泉」といわれる泉が市内あちこちにある。水源は何処なのか知らないが、中でも有名な「趵突泉」は毎秒1600ℓの水が湧出しているという。私が訪れた日も泉水のほぼ中央部の水が大きく盛り上がりわき出していた。大きな池のようになっており周囲は、昔の建物が立ち並び柳が水面に影を落としている様は他の観光地に見られない情景である。泉水は透明でとてもきれいであった。これが近くにある大明湖という湖に流れ込む。この湖も有名で散策するのにとてもいい。

また「漱玉泉」や「国龍泉」も素晴らしい。日本も静岡県の三島市内に柿田川の湧水群が有名だが、済南のような大都市であちこちに泉がわき出る都市は世界でも余り類を見ないのでなかろうか。

漱玉泉といえば、この泉のそばに有名な女流詩人「李清照」(リ・チンチャオ)の記念堂がある。宋代の詩人だがこの地に生まれこの泉のそばで暮らしたという。ところが20才位の時北方の金という国が宋に攻め入り、彼女は夫とともに南方にのがれ、そのうち夫は亡くなった。失意の

うちに作った「詞」の多くが中国人の心を強く打っている。なお唐詩に対し宋の時代の詩のスタイルは「詞」といわれ一般に「唐詩宋詞」と呼ばれている。

市内の南には千仏山という低い山がある。隋唐時代から多くの摩崖仏が彫られたためいつの日か千仏山といわれるようになった。ここも観光スポットである。ここに限らず中国全土いたるところにこのような場所がある。いくら人口が多いとはいえ私が中学生くらいの時中国の人口は4億人と学んだ記憶があるが、さすれば隋・唐時代は1億人もいなかったのではないか。全国にこれだけの仏像や寺院を作るにはやはり長い時間の流れが必要であったのだろう。

前述した泰山と曲阜は済南市ではないが、済南を旅する時はこの二つを組入れられることをおすすめし、済南市の稿を終えたい。